

平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)

第 1 講：「谷底せりあげ」とユートピア

井上昭夫

発題においては、ドキュメンタリー映画(40分)とパワーポイント(10分)を使って解説を行った。前者は、アフガニスタンと東アフリカにおける「谷底せり上げ」の活動紹介である。それは筆者が主として自然建築(natural building)の一環である土囊アドドームといわれる手法を援用して企画主導し、同志の協力を得て実践してきたここ10年間の貧困緩和自立支援活動体験報告にもとづいている。とくにヴィクトリア湖畔におけるエコヴィリッジのユニットにおいては、土囊4,000袋を積み上げたメインドームが高さ8メートルに至り、文字通り世界一を誇っている。詳しくは筆者のブログか Builders Without Border のホームページを参照いただきたい。

そして後者は、現在、財政的に経常収支比率平均で日本全国において連続3年最悪を記録する宗教都市天理市の後進性を憂い、筆者の着想する天理発ユートピア構想を中山みき教祖のことばである「奈良、初瀬七里の間は家が建て続き、一里四方は宿屋で詰まる程に」「八棟八商売」等の予言が暗示する解釈を深化・増幅させ、大和の地勢と歴史的独自性を押さえて「元の理」に見られる「規矩」の思想を原則としたユートピアを幻想し、その未来都市構想を紹介した。あるべき宗教的理想都市をイメージした建築デザインを試みたのであるが、それはまさにユートピアそのものであり、ドゥルーズ/ガタリをライブするルネ・シェレールの言う永遠の時をもつものではなく、「時ならぬもの」である。ユートピアに流れる時間は「歴史」の時間ではなく、歴史を横断する「生成変化」の時間である。教祖の一言もそのように理解すれば、神言の解釈は限りなく時間を越えて広がる。そのためには克明な現実分析にもとづいた批判力と想像力、そしてゆたかな感性を貫く自由な構想力が求められる。関連資料を配布したので、口述できない点について参加者はそれらの資料を参考にし、演題の趣旨は概略理解されたと期待している。

「谷底せり上げ」の方向については、教祖の予言や「元の理」の「規矩(天円地方)から演繹された原則に忠実でなければならない。「谷底せり上げ」の方向が「陽気ぐらし」であるとして一件着落とするのは、既存の天理教学が人類全体救済を視野に入れた共同体としてのユートピア思想を取り込んでいない思想的後進性を示している。「陽気ぐらし」を個人の心性還元論に収斂させることは一種のトートロジーであり、天理教学の非社会性を暗示するほか何ものでもない。「ここはこの世の極楽や」と信じ踊ることだけでは、個人的ユートピアの域を出ないことを意味する。「谷底せりあげ」という言葉は、谷底から山頂まで岩をせり押し上げた瞬間、岩が谷底まで転げ落ち、その谷底の岩をまた高山の山頂まで押し上げるという、永劫の罰を神から受けたシジフォスという男の不条理な労役と戦う人間の心理描写からなる実存主義者アルベール・カミュの作品『シジフォスの神話』を想起させる。カミュは高山の山頂から谷底の岩を求めて下山するシジフォスの姿に彼が彼の運命に優越する自由を見て取る。カミュは「頂上を目がける闘争ただそれだ

けで、人間のこころを満たすのに十分たりえるのだ」と述べる。どこにもないユートピアと戦うにも似たシジフォスという一人の男の姿勢は、現実に絶望視される共同体としての「陽気ぐらし」世界実現への励ましとも重なる。アフガニスタンやアフリカで体験した失望感の中での瞬時のよこびは、筆者にとってはシジフォスによる「岩」の「谷底せり上げ」のプロセスと共鳴するわけだ。

さて、天理教団がユートピアを意識したのは、我が国が昭和の初期に旧満州において「王道楽土」を建設しようと宣伝した頃に合致する。満州建国宣言が昭和7年に行われ、昭和11年には政府は20年で百万戸を送り出す計画を閣議決定した。その国策に従って天理教青年会は昭和8年を第一次とする天理村建設計画を起案した。その当初の建築デザインは神殿を中心に約50戸が入る外壁に囲まれた正方形をなして、八町四方「おやさとかた」構想の原型を連想させるものであった。設計には中山正善二代真柱を中心として、昭和普請の建築顧問である東京帝大の建築家内田祥三教授らが関わっていたと推測される。当時の記録集を基礎資料とした『日本建築学会史』によれば、天理教は満州の極貧の開拓村に宗教的ユートピア建築を目指したと克明に伝えている。敗戦によりこのユートピア構想は悲惨なディストピアに終わったが、教祖50年祭を直前に控えた「人類救済」への全教的高揚は、西欧のルネッサンス時代を彷彿とさせるものがあつた。その活動の原則となつたのが、次に述べる「元の理」に黙示される「天円地方(天は円形地は正方形)の論理である「規矩(コンパスと定規)の構造が「建築論」を伴っていたという筆者の推論である。しかし、まだこの時代の教団においては、ユートピアに道具衆・六柱神の相補機能的配置が「元の理」の「規矩」論を原則として意識されていなかった。

「天地東西南北の事に就いて」高弟から問われたとき、教祖は地と天のへだたりは「人間が両手ひろげてねたごとくや」と答えられた。一種の「公案」であろう。それに対して「人間、両手ひろげて寝れば、東西南北、おなじ程なり。是れ丸き理を、聞かせられしにや」と先人たちは悟っている。この教祖との問答は、レオナルド・ダ・ヴィンチの有名な人体世界地図に見事に対応している。それはミケランジェロが言う当時発見された古代ローマの建築家ウィトルウィウスの『建築論』にある「人体は円と正方形に内接する」という記述とも重なるからである。

上記のような次第で、教祖の予言を「元の理」の六柱神を配置した「規矩」論から読み込み、ぢばを中心とし、大和盆地全体を包摂する領域・「五里矩形」「七里一円」を都市範囲とした「天理やまとユートエコトピア」構想を建築学者らと共同してデザイン化を試みた。その「元の理」に基づいた構成原理の専門的解説については別の機会に譲りたい。また、筆者は一信仰者として「てをどり」の十一下り目の第一歌における「ひのもと」と「やかた」の身体動作は「規矩」そのものを象徴的に的確に表現していると考えて来た。その着想に拍車を掛けたのが明治20年1月27日、教祖が現身を隠された翌日に内蔵の前で記念撮影された一葉の写真に映る飯降伊蔵の持つ矩尺(矩的普請の意思)が発信・象徴する姿にあつたことも告白しておきたい。

第 226 回研究報告会「LGN の最近の重点活動」

堀内みどり

標記研究会を、4月28日に行った。当日は、午後から大学のひのきしんデーだったので、ひのきしんが終わってからの開催となった。Love Green Nepal は、地域の自力開発を目指して発足した NGO で、植林による森林再生に始まり、現在は学校建設や女子教育支援、バイオガス・プラントの設置などに力を注いでいる。本報告会は、2010年2月9日から2月16日の期間中の、カトマンズおよびパターン、パンチカル（ネパール山岳部）での「Love Green Nepal の近年の活動についての調査」の一部である。

2月8日深夜便（9日0時30分のタイ航空）にて出発し、17日早朝帰国した。Love Green Nepal (LGN) の代表を務めるアミラ・ダリさんと、事前に日程を調節し、カトマンズの訪問期間を設定したが、ダリさんの予定が急遽変更となり、彼女にお話を伺うことができたのは、9日午後と16日の午前の2回になった。

前回の訪問（2003年）から現在までの活動内容の変化や今、力を入れている活動についてお話を伺った。今回は、特に女子教育の意義と方向性について質問し、また、地域で活発になっている女性の自立活動とLGNとの関わりについて尋ねた。また、昨年、財団法人海外技術者研修協会（The Association for Overseas Technical Scholarship）が設立50周年を迎えた記念行事の一環として「AOTS 成功事例大会 “Investing in People for a Better World”」を開催し、AOTS 帰国研修生から寄せられた26カ国198件の成功事例のうち、厳選されたベスト・プラクティスの各代表（発表者）10名のひとりとなった件についての話も伺った（『朝日新聞』2009年12月19日参照）。このとき、ダリさんは、社会貢献大賞を受賞された。

ダリさんは、カトマンズ在住。日本留学を経て、1981年にAOTS 技術研修に参加。その間に日本社会の平等意識、労働倫理、問題解決手法などから大きな影響を受ける。帰国後日系企業に勤務の傍ら、1991年に設立したNGO「LGN」で、農村開発と女性教育を推進している（東大教会ようばく）。

13日には、LGNの現地サイトのひとつである、パンチカルのセンターを訪問。毎週土曜日に自主的に行われている女子学生たちの集まりに参加。その後、近くの「Women's Cooperative」の責任者4人と会談した。LGNのスタッフであるサンガット氏が同行、通訳。また、LGNでインターンシップ中の小林舞さんも参加した。

女子生徒は、毎週土曜日（ネパールでは土曜日が休日）に集



まっては、いくつかのテーマを出し合い、それについて自分の意見を述べ、それに対してコメントをする。司会者、発表者、発表について意見を言う人、全体を



纏める人（chairperson）は毎週交代する。テーマは前の週に予め決めておくものと、その日の話し合いで提案されたものを扱う。この日、私たちが聞いたのは、「学生・生徒とドラッグ」についてだった。1分間のスピーチの後、それを評価するというパターンで進められた。声の大きさや言葉の選び方、話す態度などが評価される。これは、自己表現の訓練であり、女の子が人前で、きちんと話しができるようにすること、女子生徒が自分の自信を構築するためでもあるとされる。三々五々生徒たちが集まり、この日は試験期間中ということもあって20数名の参加となった。多いときは50名以上になるという。こうして、女子教育に力を注ぎ、2003年当時始めたばかりの高等教育を受けるための女子奨学生は2人だったが、現在では、163人となり、2人はスタッフ（IT学校のトレーナー、奨学金の世話取り）、13人が教員となった。

ここでは、コンピュータ操作も教えている。なお、2003年の時はタイプを教えていた。パンチカルはLGNが当初から力を注いだ植林活動の拠点でもあり、育苗施設でもあり、昨今はコーヒーが盛んに育てられている。

その後、この地域の既婚女性が参加する女性組織のリーダーに会って話を聞いた。彼女たちの組織は約8年前に始まり、今は役員15人が中心となって運営する会員約1,700人（5カ村）の組織になった。業務の中心は女性への小額ローン（マイクロクレジット）で、入会者は毎月50ルピーか100ルピーの預金をし、その上で融資を受ける。返済率はほぼ100パーセントで、返済期日に遅れることがあっても、返済ができなくなるということはまずないという。収益で肥料や農薬、米、砂糖などを購入し、会員に売っている。LGNに協力している農家（約300人）は、有機栽培を実践しているので、農薬や肥料は使用していないということだった。

この後、バイオガス・プラントを見学。これは2003年に見せてもらったものと同じで、1頭の水牛（5頭の子山羊）の糞をもとに、ガス口1コが稼働（5人家族）。プラントの横に人間のトイレが作られていた。

15日にはLGNの事務所とアンテナショップ（コーヒー豆、岩塩、手製の紙の葉、ハーブなど）を見学。パンフレットを貰い、いくつかの報告書、最近力を注いでいるランの花の培養を見せてもらった。

その他報告会では、天理教ネパール連絡所参拝、シヴァラトリ（ヒンドゥー教の祭）、グーフア（成女儀礼の祝い）参加、スワエンブナート寺院を見学したことなどを報告。撮ってきた写真を見て頂いたのち、質疑応答があった。

(6頁からの続き)

視し、今までのように、判を押したようにいつも同じだということに頼るべきではないと教えている。

アフリカは貧困、戦争、病気と厳しい状況にある。エイズ対策は莫大な資金を要する。アフリカだけでは解決し得ないだろう。世界的援助、投資が必要だろう。しかし、アフリカは世界の乞食ではない。カソリック教会のアフリカに関する見解を見てみよう。アフリカは信仰について、将来の希望について、危機に面する人間にとって、巨大な精神的な肺臓である。しかし、この肺も病に冒されることがある。カソリックの神父は大きな宗教的財産を守るのみならず、将来の道のどん底に落ちた時の危機をも鑑みねばならないだろう。

アフリカで伸びるカソリックについて数字の上から見てみよう。

2008年の統計によると、アフリカの人口は9億4374万人である。そのうちカソリックの洗礼を受けた者が1億6492万人である。神父は47,229人、そして活動を展開するシスターは61,886人いる。教会所属の医療センターは16,178カ所ある。そのうち病院が1,074カ所、外来診療所が5,373カ所、ハンセン病院が186カ所、要介護老人、体の不自由な人を収容す

るところが753カ所、孤児院が979カ所、託児所が1,997カ所、結婚相談所が1,590カ所、社会教育センターが2,947カ所、各種保険センターが279カ所である。

アフリカ・エリトリア出身のシスター・エリーザ・キダネーは次のように述べている。

「アフリカの信者は圧倒的多数の女性で構成されている。

宗教会議の結論は『アフリカの愛される女性と娘』ということだ。愛されるべき女性ということは、私たち女性は昨日をやり遂げ、今日もやり遂げ、明日もやり遂げることだ。私たちアフリカの女性の課題は『アフリカの、また人類の運命を手中にすることだ。』アフリカはたくさんの戦争、疫病、不幸、死を見て来たが、アフリカという遺骸が私たちの目の前を通ったことを未だ見ていない。それは女性たちがしっかりと抵抗しているからだ。見てみたまえ。どこの村にも男性はほとんどいない。もちろん男性もいることはいる。しかし大部分は逃避したり、戦争に行ったり、炭坑に行っているからだ。それに比べて女性はいつも常駐している。教会の長はいつも男性だが、働くのはいつも女性だ。女性が子供を、息子たちを教育するのだ。改革は私たち女性から端を発しなければならない。アフリカは女性の力によって光明を見るだろう。」

新刊案内



本書に収められている文章は、何かの本に書いてあったことや誰からか聞いた話をまとめたものではなく、すべて私自身の信仰生活の記録です。楽しいことも、つらいこともある人生で、「おやことば」とともに生きるこの意味をその時々を考え、自分自身に向き合いながら書き綴ったものです。(「あとがき」から)

本書には、おやさと研究所兼任研究員である筆者が、2007年1月14日から12月23日まで『天理時報』に連載した、1年間の「おやのことば」と「おやのころ」が収められています。

この度、天理教道友社より「道友社ぎずな新書」創刊第1号として出版されました。

新書判並製184ページ(カラー72ページ)。

なお、販売は道友社販売所にて。(本体800円+税)

おやさと研究所特別講座

「教学と現代 VII」の開催のお知らせ

2003年以来、教学に関心を持つ教友を対象に、特別講座「教学と現代」を開催してきましたが、今年度も開催されることが決定致しました。

開催日は**8月末**を予定しております。

なお、日時や場所、プログラム等に関しては次号でお知らせ致します。

担当：おやさと研究所 天理総合人間学研究室 金子昭

(From page 13)

Mari Namba — Tenri and Sports (1) Introduction

The Tenri Sports and Olympics Research Office have carried out several projects related to Tenri sports. The main project was the “Tenri Sports Gallery,” held a total of eight times. This series will introduce a number of sports that were not covered during the eight exhibits. Further, this series will also introduce sports that prospered significantly since the end of the galleries and displayed considerable success. Further, focusing upon the way in which Tenri Sports emphasizes the nurturing of talent, this series will shed light upon Tenri alumnus who are succeeding around Japan and the world as instructors and staff. Thus, we hope to visualize the new direction for Tenri Sports to take in the future.

グローバル天理

第11巻 第6号 (通巻126号)

2010(平成22)年6月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan